

# 白金霞

五月号



平成26年5月発行 第39号

白金葭定例会案内（＊は吟行句会）

六月二十日（金） 12:00 ～ 15:00 （アビスタ第四学習室）

兼題：パセリ、蚊帳

七月十八日（金） 12:00 ～ 15:00 （アビスタ第四学習室）

兼題：半夏生、麴はつた

八月十五日（金）蓮見舟吟行（手賀沼小池ボート 9:30 出

船）＊句会（12:00 ～ 15:00 アビスタ第四学習室）

パセリ、蚊帳の参考句（6月20日分）

抽象となるまでパセリ刻みけり

田中亜美  
三好達治

水に入るごとくに蚊帳をくぐりけり

山口誓子

蚊帳に寝し妻よ歳月をちぎりける

光成高志

いねながら蚊帳の月光掌にすくふ

里帰り家族が一つ蚊帳に寝る

月例句会報（14／5／16 7名欠5

武者人形、粽）

飯田孝三

麴はつたや剃眉の祖母腰曲げて

まだなんの八十歳はちじゅうと二つ笹粽

武者人形衛兵の人形並べたる

五月来るいつも同おんなじジーンズに

上野大仏に紅唇木下闇

増田陽一

武者人形ときどき光る奥座敷

春尽きて少女と猫は共犯す（バルデユスの絵）

変圧器囀りてをり巢のありて

粽解く昼や昔の肥後守

風吹けば地の目を読んで蟻うごく

光成高志

藺の紐をくるくる解いて粽かな

恙なきや粽を呉れし越こしの宿

めらめらと燃ゆる白炎白牡丹

苗売りの緑びつしり種苗店

武者人形臍当立てゝ脚となす

光みち

笹粽越後の宿の膳に載る

粽結ふこつを教はる女将より

一本に九輪のひらき白牡丹

飾武者甲冑櫃に腰を掛け

ががんぼの叩きのやうに障子打つ

吉羽多美子

文机に牡丹ひと日の奢りかな  
町騒をきて安らぎの牡丹園  
牡丹の白の散りゆく夜のしじま  
粽食ぶ金婚の日を明日にして  
武者人形飾る襖の破れかな

倉田紀子

三代に継ぎしならひや笹粽  
菓子箱に蟪蛄の百生るるかな  
武具飾り嬰の襁褓の替らるる  
菖蒲の湯待ちて寝ころぶたたみかな  
草野球見て来し夫の夏はじめ

松村幸一

唾吞んで粽をいまだほかずに  
万太郎句碑の細文字三社祭  
五月人形紅顔ながら月日かな  
神輿来るその又はるかから来る  
白頭を寄せて語らふ宵宮かな

浅野正美

武者人形さがす刀は子らの手に  
粽解く蘭草の長さ過ぎし日よ  
こいのぼり空を泳いで川の上  
境内の力士の手形花すみれ  
咲きそろふ藤の花房ゆらす蜂

青木啓泰

黒糖の粽もありぬ和菓子店  
柏餅過ぎてても粽売られおり  
粽解きポプラ並木に出て食べる  
六波羅へ行けと鳴き出す雨蛙  
外厠今年は燕寄り付かず

武者昭七

しみじみと見れば優しき鐘馗かな  
水風呂に投げ入れて菖蒲薫りけり  
茅巻解く指の動きのもどかしく  
万緑の庭前にして武具飾る  
飾兜の緒の色褪せて棚の上

程合は猫の肉珠粽蒸す

如是我聞青葉に建つ碑僧姿（伝通院）

新入生みなソリストでオケ成らず

日の目見ぬ居間の書掠<sup>かす</sup>る初夏の風

武者人形ここにも兄を見たやうな

下町の伯母さん粽の手を省く

女だけ全く縁なし武者人形

泰山木白き蕾を僅かつけ

どくだみを今から少し掘りおこし

かえでの葉枝の先は赤く染め

選句結果（数字は入選数 左添書きは添削句）

3 妙<sup>はつたい</sup>や剃眉の祖母腰曲げて

3 文机に牡丹ひと日の奢りかな

3 外厠今年は燕寄り付かず

2 六波羅へ行けと鳴き出す雨蛙

2 武者人形ときどき光る奥座敷

工藤宏子

2 程合は猫の肉珠粽蒸す

2 恙なきや粽を呉れし越後宿

2 恙なきや粽を呉れし越しの宿

2 神輿来るその又はるかから来る

2 菓子箱に蟠螂の百生るるかな

2 粽解きポプラ並木に出て食べる

2 武具飾り嬰の襦袢の替らるる

2 粽食ぶ金婚の日を明日にして

2 茅巻解く指の動きのもどかしく

2 唾呑んで粽をいまだほどかずに

2 変圧器轉りてをり巢のありて

1 ががんぼの叩きのやうに障子打つ

1 万緑の庭前にして武具飾る

1 上野大仏に紅唇木下闇

1 武者人形飾る襖の破れかな

1 万太郎句碑の細文字三社祭

1 飾兜の緒の色褪せて棚の上

1 武者人形衛兵の人形並べたる

1 春尽きて少女と猫は共犯す

1 春尽きて少女と猫は共犯す（ヴァルデユスの絵）

1 武者人形ここにも兄を見たやうな

1 苗売りの緑びつしり種苗店

陽一

1 下町の伯母さん粽の手を省く

陽也

孝三

多美子

啓泰

宏子

高志

幸一

紀子

啓泰

紀子

多美子

昭七

幸一

陽一

みち

昭七

孝三

多美子

幸一

昭七

孝三

陽一

陽一

宏子

高志

陽也

1 1 一本に九輪のひらき白牡丹  
1 武具飾る甲冑櫃に腰かけて  
" 武者飾甲冑櫃に腰かけて

飾武者甲冑櫃に腰掛けて

1 粽解く藺草の長さ過ぎし日よ

1 水風呂に投げ入れて菖蒲薫りけり

1 五月人形紅顔ながら月日かな

1 町騒をきて安らぎの牡丹園

1 風吹けば地の目を読んで蟻うごく

1 藺の紐をくるくる解いて粽かな

1 どくだみを今から少し掘りおこし

1 しみじみと見れば優しき鐘馗どの

1 しみじみと見れば優しき鐘馗かな

1 三代に継ぎしならひや笹粽

1 武者人形さがす刀は子らの手に

白頭を寄せて語らふ宵宮かな

かえでの葉枝の先は赤く染め

めらめらと白炎の如白牡丹

めらめらと燃ゆる白炎白牡丹

泰山木白き薔を僅かつけ

まだなんの八十歳はちじゅうと二つ笹粽

柏餅過ぎても粽売られおり

如是我聞青葉に建つ碑僧姿（伝通院）

みち

"

正美

昭七

幸一

多美子

陽一

高志

陽也

昭七

紀子

正美

幸一

陽也

高志

陽也

孝三

啓泰

宏子

牡丹の白の散りゆく夜のしじま

黒糖の粽もありぬ和菓子店

菖蒲の湯待ちて寝ころぶたたみかな

新人生みなソリストでオケ成らず

こいのぼり空を泳いで川の上

五月来るいつも同おんなじジーンズに

草野球見て来し夫の夏はじめ

日の目見ぬ居間の書かする初夏の風

日の目見ぬ居間の書掠かする初夏の風

境内の力士の手形花すみれ

武者人形臍当立てゝ二つ置き

武者人形臍当立てゝ脚となす

女だけ全く縁なし武者人形

咲きそろふ藤の花房ゆらす蜂

粽解く昼や昔の肥後守

笹粽越後の宿の膳に載る

粽結ふことを教はる女将より

粽結ふこつを教はる女将より

多美子

啓泰

紀子

宏子

正美

孝三

紀子

宏子

正美

高志

陽也

正美

陽一

みち

"

### 一句鑑賞

光成高志

### 武者人形衛兵の人形並べたる

孝三

武者人形で切れる。「衛兵の人形並べたる」が作者の主  
題である。衛兵は日本では近衛兵などを連想するが、西

洋では、そう、倫敦のバッキンガム宮殿を守る衛兵をすぐ思い起こす。その交代式が観光客に人気があると聞く。その衛兵のいでたちが特異なのでその人形も人気があるのでしょう。日本の端午の節句に飾る武者人形ならで、倫敦の衛兵の人形をずらり並べてご満悦なのである。東洋の習慣に西洋を取り込んで、いかならんという作者の得意顔が浮かんできます。そのように作つてあるところ、諧謔の味わいがあるし、少しかるみにも通じている。

武者人形ここにも兄を見たやうな

宏子

武者人形とは、端午の節句に飾る人形や鎧兜のこと。顔つきの武者人形は高価になるので、兜、鎧、具足櫃など単体のものが多い。それでも、十万二十万円もし、三越で売っている一水作の鎧床飾セットは三百万円近くの値が付いていた。掲句の武者人形は、おそらく凛々しい武者顔をしているのだらう。私は木目込みの桃太郎の可愛い顔を想像して仕方がないが、武者人形を飾る宏子さんの目には、先年亡くなられた敬愛するお兄様にどうしても重なってしまうのだらう。

飾武者甲冑櫃に腰掛けて

みち

句会当日の朝、同居のみちさんが、起きて来ない。目まいに襲われ吐き気があるという。私の前で何回も吐く。そのうち治るだろうと思ひ、私は朝食を作り一人済まして二階に上がると、何回も壁を叩いて呼んだのにとひう。

脱水症状気味なので、点滴をしてもらいに入院するといひう。電話してくれといひうも、自分でしるとケータイを渡す。かにかくに書いていたら切がない。兎も角も、病院に連れて行き、ベッドに置いて例会に臨む。私も少し心が揺れていたのか、別れる時にもらつた投句短冊を精記一覽表に書くのを忘れてしまつた。選句の時に追記して選をお願いした。帰つて、目まいも止つた彼女の「どうだつた？」に答えて何回も推敲したものが掲句である。人間が、甲冑櫃に腰掛けて武具を飾るやうに書いてあるのは違ふといひうことから、直したものだ。飾つてある甲冑が皆櫃に腰掛けていたのを類句がないのを確めて出したとか。孝三さんの鑑賞は原句についてです。

唾呑んで粽をいまだほかずに

幸一

茅巻解く指の動きのもどかしく

昭七

粽は普通熊笹にもち米を包んで藺草でしつかり巻いて止め蒸して出来上がる。笹の緑と藺草の緑がしつくり行つて、中の糯米の白さが想像されて、見ただけで唾が出てくる。思ひわず「唾呑んで粽をいまだほかずに」となる。やさしく書かれていて、誰でも思ひ当たる粽の味わひがある。直ぐに、「粽解く指の動きのもどかしく」と紐の藺草を解く。最後が工夫して止めてあるのでそこで引つかかってもたもたする。段々、唾が口中に溢れるやうになる。数の関係で前者の句を選んだが、後者の句も粽

の本意をよく表現されている。十年も通った六日町の妹に似た女将さんは元気でいるだろうかと思う。

## 一句鑑賞

飯田孝三

## 程合は猫の肉球粽蒸す

宏子

猫はきれいい好き。折々、全身を隈なく舐めまわし、丹念に毛繕いする。内腹などは、後肢を片方つつツンと上方に突き出して舐める。そんな時、ぽつちり、むつちり、ピンク色（毛並みによっては異色の斑が入る）した肉球をさらす。その愛らしい、もちもち、しっとりした感触から粽を連想したのである。うん、分かる。面白い。肉球もその隙もしつかり舐める。和みある音を連ねた、情韻相伴の妙がさわり。初っぱなの「ほどあい」がいい、もし「ころあひ」だったたら、粽はひねて、こわばる。「蒸す」が手柄。「粽」はふつう「食ふ」、「解く」など、「蒸す」は自前、和氣藹々の光景が見えてくる。「程合」は、ひら仮名書きもあるだろう。

## 文机に牡丹ひと日の奢りかな

多美子

一読、咲き誇る牡丹が目映る。牡丹は、近隣、あるいは知己・友人からの贈物である。庭の切花もありうるが、それでは感興が薄れ、修辞「かな」の胸懷の厚みが伝わらない。花の奢りに、つい自分まで奢った気分になる。そしてふと、人の世の盛り陰りを思うのである。見

落とせないのが、牡丹の位置の確かさ、すなわち「文机」の目の高さ、座高である。「ひと日」の間合いと響き合い、移ろう花の翳りを映す。よぎるのは無常迅速の思いだろうか。椅子で見る、卓上の牡丹だと、散ってそれっきり。又、かりに「一日」なら、心の壁にたゆとう、氣息が伝わらない。小津映画の場面にも似た一カットである。「文机」が臍、「ひと日」が手柄。なお、中七は「ひと日牡丹の」がいいだろう。牡丹がいつそう咲き定まる。

## 文机にひと日牡丹の奢りかな

下町の伯母さん粽の手を省く

陽也

下町は江戸・東京を通じその繁栄の担い手、文化・風俗・生業の中心。江戸期以来、日本の活気はここに発する。なにしろ四百年も前には、江戸は、その殷賑ぶりたるやすでに世界最高を極めたところ。ところで、將軍、大名から庶民までが太平、安心をえられたのは、御台所、奥方からお上さんに至る器量、甲斐性ありてこそ、尾張名古屋は城でもつ、お江戸日本橋や女性<sup>にしよう</sup>でもつ。今更じやない、昨今の男ども見りや自明だ。つい講釈が長すぎたが、その代表格が下町の御内儀<sup>かみさん</sup>、氣働き、身のこなし一つとっても、敵手<sup>かなうて</sup>なし。こまめによく動き、旦那の手綱加減も申し分ない、お金も時間も仇な無駄遣いはしない。お江戸の賑いも、当世日本の面目もまさにそのお蔭である。美味しい粽づくりの手際などは更々。口誦はづむ、一句のひびきは、江戸の賑いに通い、伯母さんの手捌きを見

せる。「伯母」さんが手柄、敬意をこめる。「叔母」さん、まして「小母」さんでは、潑刺の美味が遠のくだろう。粽の「手を省く」は「つくらず」買うではなく、「手際よく」つくるとみた。「伯母さん」の親しさがいい、明るく、しつかり者で、気どらぬ人柄や身のこなしが目につく。

### 武具飾る甲冑櫃に腰かけて

みち

櫃は、大事な品物を仕舞う大形の匣。地方の元庄屋か町場の老舗のお屋敷だろうか、大家の端午の祭り準備である。石蔵から重い甲冑櫃を運び出し、やおら武者人形と太刀、甲鎧、標幟一揃いを取り出して、飾り立てにかかる。なにしろ伝家の宝物である。大層、手間隙かかり、気骨が折れ、くたびれる。当世のちびた代物とはわけが違ふ。人形、甲鎧ともに、その丈、嵩は櫃に腰かけてやるのに恰好。うつかり、いやあ現代人はきつとそうする。ご先祖さまは嘆く。永代の家玉を納める御櫃であるでよ、世が世なら、家人なら勘当、手代、端（た）なら蹴首（くび）はまちがいない。甲鎧の威厳、偉観とその入匣についての腰かける、ちぐはぐがさわり。面白い。さらに、いいのけた俳諧が逸品。

（出句一覽掲載順）

### 一句鑑賞

武者昭七

恙なきや粽を呉れし越の宿

高志

いつのことかは知らぬ。あるいは青春の日か。越路の

旅の途中の宿で、粽をもらったのである。折りしもないま粽の季節、それを懐かしく思い出しているのである。「恙なきや」は書簡の冒頭に据える決まり文句であるけれどもそれがここではよく生きている。はるかな青春のたびの思い出とひとの情をしみじみと懐かしんでいる。ここにやさしい作者がいる。

### 粽解く昼や昔の肥後の守

陽一

肥後の守を懐かしむ声が句会でもあがった。折込式の小刀の一つで昔の小学生の筆箱には鉛筆削り用として必ず仕舞われていた。「肥後守」の銘の由来も知らぬまみつか記憶に懐かしく焼き付いているから不思議である。昔使った肥後守を取り出して粽を解く。昔に帰るひと時である。

### 日の目見ぬ居間の書掠る初夏の風

宏子

めったに開けることもない旧家の奥座敷であろうか。天気晴朗の日、風通しに開け放てば折からさわやかな初夏の風が掛け軸の書をわずかに揺らすというのである。「かする」と、風を主人公に据えたところが面白い。

### 五月人形紅顔ながら月日かな

幸一

「ながら」は「・・・のままで」の意の助詞。五月人形は昔の紅顔のままでそれを取り出す人間のほうは・・・というのである。一年一回の人形との対面のうちに歳月の流れを思うことしきりである。

牡丹の白の散りゆく夜のしじま

多美子

取巻く夜の闇と静寂のうちに散っていく大輪の牡丹の  
白い花びらに厳肅なものを感じる。「しじま」と体言でと  
めたところに余情が広がる。品格ある句だ。「ぼうたん」  
と長音で読むべきだろう。

同じ作者の 文机に牡丹一日の奢りかな はこれと対  
照的な絢爛と咲き誇る牡丹。置かれた場所が文机ゆえに  
「奢り」がこぼれる。

一本に九輪のひらき白牡丹

みち

一本の茎に九輪も華をつけるとはなんと豪華な。作者  
自身も驚いているのである。その驚きと喜びが句のリズ  
ムに踊っている。

一句鑑賞(38号分)

河村博旨

昼の寄席はねて上野の花曇  
満開の花の中から鳥の声

多美子  
正美

この二句、上野の山の桜、近くの寄席劇場や鰻屋を連  
想しました。

徐に巨船入れたる湾の春

孝三

この句は、セクシーです。「入れたる」「湾」「春」「船」  
という言葉で恋愛、性交、妊娠をと連想します。読者の  
私の偏見でしうか。いい句だと思いますが・・・。いつ  
も有難く拝読。

ハガキ句40報管見

光成高志

舊乃木邸門入る左手青棗

孝三

赤坂の旧乃木邸の門を入れば左手に棗が青い実をたわ  
わにつけている。庭に一本棗の木と歌われた水師營の会  
見を思い出す如く。道路を隔てて青山墓地が広がり、そ

ハガキ句40報(08/9/28)

孝三

いぼむしり背筋鼻筋大事にしよ  
舊乃木邸門入る左手青棗

水元公園(9/28)

秋淋し眼窩に光照り返し

哲也

今年酒供へてありし太子堂

敏子

吹く風に鳴子の如く絵馬の音

アツ子

浮草もみじ水路覆ひて道のごと

多佳子

しばらるる地藏の縄の秋意かな

たか子

秋風のどこまでも水押し流し

妙子

初風絵馬の願ひが騒ぎ出す

三穂

からからと絵馬吹く風の秋意かな

裕子

学習田一反ほどの豊の秋

修平

釣人と驚一枚の秋の水

和子

実石榴や業平山と号しをり

高志

の北側の一角に乃木大将の連理墓がある。

(H. 20. 9. 28)

秋淋し眼窩に光照り返し

哲也

## 実石榴や業平山と号しをり

高志

飯田孝三

葛飾は水元、業平山南蔵院での囑目。境内、石榴の実が秋晴れの日に照り映える。山号縁り在原業平、その人の物語の境をふと思う。石榴の実の輝きと伝説の官能の誉れの照り合いがめでたい。明るく、艶やか、堂々。「業平山」のシンメトリーの形象は、伝承千の重みに通うかである。折口信夫によれば、(色好み)は帝王の徳の一つとか。「や」が抜け、「をり」につくづく実感。(同院は、山号、東下りの業平に由縁、昭和の初め、墨田区東橋から移転)。

## 今年酒供へてありし太子堂

敏子

「あら、もう新酒！」境内、太子堂に新酒のお供物。新走りの一升瓶かな。葛飾は、かつて関東一円の水田地帯。「立春の米こぼれをり葛西橋」(波郷)。太子堂は聖徳太子を祀る。同地と太子との謂れは不知だが、新酒の面目も太子堂ならばこそだろう。句の太み、又、然り。「ありし」に感興。さりげなく、これ又、座五に置く、「太子堂」の左右対称の形象がどつしりと、殊更、ふところ深い。

水元公園囑目。きらめく水面の秋は淋しいという。「淋

し」が眼目。鋭い内観の所産、情趣ではない。句思相伴

の調べが冴える。A Ki Sa Bi Si Ga n Ka Ni Hi Ka Ri Te

Ri Ka E Si。母音「あ」、「い」を畳み込む。「あ」音六

音中四がカ行音(濁音含む)、上五中七は頭韻を踏む。

かつ、「い」八音中三音が上中下、各脚韻を踏み、就中、

内観を深める。巧んでも成らぬ、自得の韻である。ここ

る惜い。

秋風のどこまでも水押し流し

妙子

景色が目浮ぶ。「秋風の」は、「の」か「や」か。

学習田一反ほどの豊の秋

修平

都市圏郊外の風景寸描。小さな豊の秋である。黄金の稔に生徒らの姿が見えてくる。出征兵士の留守田を勤勞奉仕した昔を思い起こした。戦中一時期、農村の小学上級生は教室より田野で過ごすことが多かった。時移り、世は変る。おっと、昭和一桁の余談。

釣人と鷺一枚の秋の水

和子

鷺の後で切れる。「秋の水」は「水の秋」か。

吹く風に鳴子の如く絵馬の音

アツ子

鳴子の「如く」、絵馬の「音」は、ちよつと安易ではないか。

浮草もみじ水路覆ひて道のごと

多佳子

説明を出ない気がする。

しばらくの地蔵の縄の秋意かな

秋風のどこまでも水押し流し

初嵐絵馬の願ひが騒ぎ出す

からからと絵馬吹く風の秋意かな

いづれも推敲を要するのではないか。

たか子

妙子

三穂

裕子

(H 20・10・22)

## 実石榴や業平山と号しをり

高志

結「をり」が〈さわり〉。先の管見の「つくづく実感」

では、点晴を欠く。「実感」の中味をパスだ。「をり」は、

見て、感じ入る“驚き”の口吻。感慨、感興、感激等々

その感懷は複雑である。当の寺の風情がかの業平のイメ

ージに“ちぐはぐ”なら、「感慨」に諧謔が匂う。(これ

がまあ業平山とな石榴の実。『どんぴしゃり』なら、納

得の「感興」。)なぜ、ここに「業平」山、との怪訝の胸

懷もあるかな。(これは寺の案内で氷解。)こうして、あ

れこれ想像(現地に行ったことがない)するのも、読み

手の余得。俳句の楽しさ、また、ここにあり。

(H 20・10・25)

## お便り広場 (到着順、敬称略)

前略 先日は、お忙しいところ、奥様もおそろいで現代工芸展にお出かけ下さった上、お土産まで下さり有難

うございました。何度も申しあげましたが、光成さんという素晴らしい方と出会う事ができ、竹をやっていてよかったと思っています。これからもよろしくお願い致します。会場で私の作品を見て「内部応力・」もう一度教えて下さい。よく言い得ている表現だと思いました。その時は、ギャラリートークで使わせて頂こうと思っています。しましたが、その時には忘却のかなたでした。よろしくお願い致します。(中略) いただいた「白金霞」第37号の中で

崖ありて早稲田を望む竹の秋

何となく「竹の秋」が詠まれているので興味を持ちました。同封した「竹の秋」の写真、芦田川に架かる「福戸橋」から約一キロメートル上流で見つけた「竹の秋」

です。世はまさに「竹の秋」の季節、食卓に筍が毎日のようにのぼります。これから秋の作品作りの序章が始まります。同梱した作品集は、千点余の日本

の竹工芸作品を蒐集した米国人が、桑港の東洋美術館へ寄贈された時、蒐集作品の中から抜粋したものです。最近この作品集が市販されている事を知り、



竹工芸に関心を持つてくださる方にお贈りしています。  
どうぞご笑納下さい。時節柄、くれぐれもお体ご自愛下さい。敬具

追伸 五月一日「現代工芸京都巡回展」へ綾女さんが見に来てくれます。写真ありがとうございます。

(H. 26・4・29 門田祐一)

拝復「白金葎」第38号拝受し、感謝。(鑑賞欄に同じ) いい句だと○○ようが・・。いつも有難く拝読。ご健筆とご健康を祈り上げております。皆様のご健筆も祈念しています。草々。

(4・30 河村博宣)

白金葎第38号拝受致しました。だんだん縁遠くなりました。雑誌としてはすばらしいですね。五月三日の件ですが、今6人分(和室堀こたつ式)確保しています。八人位はつめれば入ると思います。当日また人数は電話致します。当日は法隆寺展を楽しみにしています。いろいろとお世話になります。

(4・27 小山陽也)

とにかく先日の吟行では皆様の勉強振りに圧倒されました。私は全くの勉強不足です。今後ともよろしくお願ひ申しあげます。益々のご活躍を祈ります。

(5・12 小山陽也)

思いがけず十二日に吟行の資料を頂きました。とにかく私以外の人は本当に見事です。ね。平常の心がけからして立派で感心しました。もう少ししじめにとりくまな

ければ大いに反省しました。なかなか実行できないのがいけません。十六日は(後略)(5・13 小山陽也)

高志様 前略 いつも大変お世話になっております。

今月の句会に出席できませんので、五句お送りいたします。よろしくお願いいたします。(十五日・十九日「四国4県をまるごと周遊」に出かけます。感動を句に作れるとよいのですが・・・)草々 (5・13 浅野正美)

目には青葉でカツオが高値らしいですね。当地方米場地帯全て田植が了りました。先月霞ヶ浦のチューリップ祭りが終了し、六月は鮎釣大会が旧東海村で行われます。

横利根一帯。八王子方面からも愛釣家がバスチャーターで来るのです。賞品はおおむね全員に地産の特産米をつけます。光成高志様 H 26・5・14 水 青木啓泰

みちさんのお加減はその後いかがですか。句会でお目にかかれないのは大変寂しいことです。一日も早く回復されて、次回はぜひ元気なお顔を見せて下さい。

(5・17 武者昭七)

先日の例会では、お世話になりました。みちさんの検査結果が良好でよかったですね。日頃のお忙しさやお氣遣いで疲れが溜ったせいでしょう。毎日のスケジュールを見直され、ゆつくりご健吟ください。句会で『野火』一部コピーをお渡しするのを忘れました。別送しましたので、ご覧下さい。(H. 26・05・20 飯田孝三)

## 受贈誌（五月号）

遠目には蠡く重機霾晦（彩116号）

開耶姫裳裾ひろげし大霞（Ⅱ）

平野ひろし

Ⅱ

掘割の水位程よき残り鴨

（あすか5月号）

山尾かづひろ

啓蟄や池にとび出す杭一つ（野火五月号）

池田啓三

花どきや鉄骨高く組み上げて（Ⅱ）

菅野孝夫

木の芽まだ影ともならず地に揺れて（Ⅱ）

大谷のり子

## 俳窓評論纂

\*多美子さんが「杉」へ特別作品を発表されました。

さくらさくら

吉羽多美子

むすび食ぶ花の間より空の青

寄席はねてあとを上野の夜桜へ

宿坊へくぐりてしだれ桜かな

どこまでの桜並木や利根堤

車座に女ばかりの花の宴

空壕にわたして桜大樹かな

咲く桜散りゆく桜一と世また

人の死に己を重ね桜どき

手に届く程に富士ある桜かな

花曇髪形ちよつと変へてみし

花冷や花豆甘くあまく煮る

花疲れきつめの指輪はずしゐる

\*青江由紀夫さんの同人誌海峡派130号が送られてきた。

随想に「銀次郎の日記」の連載が載り、中に白金葎はくきが紹介された。と言つても俳句の紹介ではなく、毎月

発行と俗ぼつく紹介されている。氏は秋元不二夫さんのように人口肛門の初体験とサブタイトルをつけた闘病記になっている。これがこれが最後の日という詩で閉じられている。これが面白い。そうあわてなさんなとついメモした。

## 俳窓雑感

飯田孝三

方百里雨雲よせぬぼたむ哉

蕪村

牡丹といえは蕪村。「牡丹散て打ちかさりぬ二三片」、

「ちりて後おもかげにたつぼたん哉」はとくに名高い。

掲句は、その山とある牡丹の句の一つだが、前二句ほど

は知られていないだろうか。ともあれ、蕪村は、たいて

い牡丹を目交に見る。豊麗、艶冶な牡丹を詠い、気宇壯

大な景色を描いては追隨を許さないが、方百里の広景を

負う牡丹は珍しい。

さて、掲句からどんな光景を想像するだろう。おおよその評釈、鑑賞は、同音異曲に、見霽かす青天白日の下に咲き誇る牡丹の威容を賛える。雨雲どころか、全天、雲一片ないと見るのである。いうまでもないが、「方百里」

は、百里四方、広大の意、「ぬ」は否定。はて、全天快晴をいうのに、なにゆえ、ありもしない「雨雲」の幹旋が要るのだろう。実作の実感として、俳人はあらぬ「雨雲」を巧む迂遠は行わない。雨雲が見えるのである、方百里の視野の果を黒雲が奔るのが。つまり、「雨雲よせぬ」は、まづ目にした、雨雲（の存在）を言外に措き、その雨雲を「寄せつけない」ということだ。そもそも、「物」を見なければ、「ひかり言ひとむる」余地はない（注<sup>1</sup>）。俳句の要諦は省略にある。「方百里のかなた、地空の境を雨雲が押し渡る。だが、牡丹は、上空に雨雲の欠片も寄せつけず、瞭然と咲いている」のである。牡丹を見詰める蕪村の視線が感じられる。通解は、散文の文脈で字面を追って誤った。そして、見落とせないのが、「ぼたん」ならぬ「ぼたむ」。他句の表記は、殆ど「ぼたん」（注<sup>2</sup>）。「む」は、いわば蕪村の言わぬ思いの固まり、その一語に特別の思いを籠めたのである（注<sup>3</sup>）。終辞「哉」に他句にはない情懷の深さを感じるゆえんである。花の容姿に「牡丹花は咲き定まりて静かなり花の占めた位置のたしさ」（木下利玄）と、底通するものがあるだろう。

通解の立場ながら、安東次男は、さすが「空は快晴であろが、一点の雲のないというわけにはゆくまい」と躊躇い、さらに「四隅には牡丹の力が涸れたならたちどころに天を覆って拡がりはじめる暗雲の気配がある」と

煮えきらない。（与謝蕪村）講談社学術文庫）。初案は「方百里雨雲尽きてぼたむ哉」。雨雲、吹き晴れの様相である。蕪村は、この平板な叙景にあきたらず、あえて、意志をこめ「寄せつけない」と断じたのである。雨雲を「沈静」から「生起・発展」に転換し、それを拒む。

掲句は、安永六年刊、『新花摘』所収だが、諸記録によれば、それに先立つ二三年、蕪村自身が病気がちのうえ、結婚をひかえた娘くのが体調を崩すなど、心身の疲れが重なり、寧日ないありさまであった。前年十二月、京都の商家に嫁いだくのは、嫁家に馴じまず、蕪村も先方「爺々」の「金儲け」だけの根性が腹にすえかね、半年足らずでくのを「取り戻し」ている。それらの身辺事情をふまえて、安東は「敢えて「よせぬ」としたのは、蕪村が「ぬ」の措辞に深く執着したからと受け取れる。一句の客観的事情をこえて、牡丹の意思、ひいてはそれに託した彼自身の拒絶の意志を通わせたのではあるまいか」という。行き届いた鑑賞だと思う。そうだとすれば、牡丹は、くのか、そして又、蕪村自身の投影とも見てとれ、彼の「拒絶の意思」とともに、なにかが“ふつきれた”気持ちが伝わってくる。

（注<sup>1</sup>）「物を見えたるひかり、いまだ心に消えざる中にいひと

むる」（赤草紙）

(注2) 地車のとろとびくぼたんかな

寂として客の絶間のぼたん哉

ぼたん切て気のおとろひしゆふべ哉

ちりて後おもかげにたつぼたん哉

(注3) 「む」は、内に籠る何かを外に出す意味を伝える

『日本語の深層』熊倉千之 筑摩選書。(平26・01・28)

旅のうたを読む――椎の葉に盛る――

武者昭七

家になれば筈に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る

万葉集二四二 \*有馬皇子

普通には悲劇の皇子有馬皇子の悲しみのうたとされるが、上の句で日常の営みをい下で旅という非日常の営みをいう。家にいるときには筈(ケ・食物を盛るための器)に盛る飯だけれど、今は旅の途中でそれもないから椎の葉に盛るのだ、というのである。椎や椿や檜などと同じく我が国の太平洋側を覆う照葉樹林帯の代表的な植物で山の斜面などに群落をよく見かける。樹勢が強く初夏の芽吹き頃などはその新芽で全山を黄色に染めあげ特有の甘い香りを強烈にふりまく。大木になり、その堂々たる容姿から神の寄りつく聖なる樹、神木ともされた。飯を「椎の葉に盛る」というのはみずから食するというよりは、路傍のサエノカミに捧げて旅の安全を祈

願したと取るほうが自然な気がする。旅人の通過する峠や境などにはサエノカミが道を塞いでいて旅人は捧げものをして過ぎなければとんだ災難にであうとされていたのである。古代のそんな民間信仰を踏まえた旅のうたとりたい。みずから食する器にしては椎の葉は小さすぎようし、路傍のカミにささげるためとればつややかな葉の緑に飯の白さが映えてつつましく美しい旅の情景がみえてこよう。次の歌も同様である。

\*三六代孝徳天皇の皇子。斉明天皇の時謀反ありとして逮捕処刑。一般にその際の歌という。

磐代の浜松が枝を引き結び真さきくあらばまた還り見む

同 一四一

旅からの無事な帰還を祈る呪術としてあったのが「結び松」の風習らしい。二本の松の枝を互いに結び合わせるとも、あるいは自分の魂を分割して木の枝に結び付けるともいう。前の歌と同じく当時の旅の習俗が背景にある。磐代(紀州街道の宿場)の海岸の松の枝を結び合わせて旅の無事を祈るけれど、もし願いどおり無事にもどされたらまたこの松を見たいと思う、というのである。「見む」という強い語調に「決心」がこもるのは無事な帰還への強い願いがこもるからである。

以上二首、皇子の悲しみを表に歌おうとも、歌の根底にあるのは古代の旅人の背負った旅の過酷さである。

## 我孫子日記

4/18例会。4/20\*都美術館。4/23SOA。4/30SOA。5/32吟行句会(法隆寺展)。5/5\*3アビスタ。5/7SOA。5/8新パソコン導入。5/94\*目白台吟行句会。5/14SOA。5/16例会。  
\*竹の毬渦巻く竹に包くる<sub>ま</sub>れて

南洲像紋付袴若葉中

高志

2\*樟青葉若葉渦巻く人の波

牡丹散つて吉祥天の紅残る

黄金週間上野の森という器

端午の節句二歳の時の太子像

轉の真中心六角堂

春深し星曼茶羅の星暗し

天邪鬼み足抱へておらび哭く

楠の若葉小さく赤味おび

\*3藤房の揺るるは香り共にゆれ

\*4注連縄<sub>しめ</sub>巻きて椎の大木緑濃し

緩みなき芭蕉巻葉の直立す

陸亀の散歩に出会ふ薄暑かな

蔦茂るルルド洞窟祈りの場

野里子

敏子

たけ子

高志

若楓洞窟に立つマリア像

冠木門出で神田川落椿

一艸人  
敦子

## 編集後記

バルテュスの絵の句が陽一さんより投句された。単なるエロスの絵とは訳が違ふとのこと。来月末まで会期があるので上野に見に行きましょう。4月末に同じところで門田祐一さんの竹工芸品が展示され、お便り広場にあるようなご丁寧な手紙を頂きました。竹工芸も実用の利を離れて夢や思いを竹工芸で表現する芸術の一分野を確立しています。陽一さんの版画、三原君の油絵も親しんできましたが、祐一さんの竹工芸も奥が深そうです。

ウインドウのXPを使っていました。が、メンテナンス放棄されたので、この度新しく、ウインドウ7を入れしました。慣れるまで時間がかかりそうですが、ゆっくり編集を進めたいと思っています。

白金霞 第39号 平成26年5月発行  
編集・発行人 光成高志(TEL&FAX 04-7187-1068)  
発行所〒270-1119我孫子市南新木2-14-17  
表紙の題字…加納綾女。写真は白金霞